〔東京家政大学研究紀要　第20集(1)，　p.11～21，1980〕

愛着・コンピテンス・母子関係

—理論的概観—

大　瀧　ミドリ

（昭和54年9月29日受理）

Attachment, Competence and Mother-Child Relationship

——Theoretical Perspectives——

Midori Otaki

(Received September 29, 1979)

序

近年，児童発達心理学の分野では社会・情緒的発達と認知的発達の関連をみる研究が多くなされ，特に母子の愛着と Competence の関連について興味と関心が集中している．しかしこれらに関する概念規定は研究者によりかなり相違している．本稿ではアメリカやイギリスの主な研究を概観し，今後の研究のために知見を得ようとするものである．

愛着について

attachment, object relation, identification, basic trust, dependency, trait, discrete behavior, organizational construct, はすべて乳児と保育者との特別な関係を説明する概念として用いられている．つぎに主な研究においてどのように愛着概念が定義されているかみることにする．

a.　精神分析学　　母子関係を最初に明確に体系だてて説いたのは Freud[55] である．彼は乳児は口唇期にあり，自己と他者との弁別は不可能であるが，飢餓体験を通して自己の外の世界に気づき，さらにこの飢餓が母親によって解消される体験を通して，母親を対象として認識するようになると説明している．この状態を object relation という．この段階では母親の存在そのものが乳児の満足の対象であり，このことは母子間に愛着が成立したことを示すものである．Erikson[13] は最初 Freud と同様に愛着と口唇的結びつきを考えていたが，その後各発達段階の発達課題・危機の考え方から論ずるようになった．そして最初の危機とは基本的な信頼と不信が形成される時期であり，これは口唇期に相応する時期である．この時期に「…乳児は母親のやり方を学び，母親は自分のやり方を乳児のやり方に調節する過程を通して信頼感を育て，与えられたものを受け入れる過程でその感覚を機能させる（p. 58)[13]。」とし，彼は単に基本的な欲求の満足者としてのみ母親の存在を重視せず，むしろ母親と乳児の相互作用の質及び母親の養育態度の質的面を重視している．しかしながら，精神分析学における愛着はいずれも多分に内面的，心理的，抽象的であり，検証し，操作することは非常に難しいために学習理論の立場から新しい概念が提出された．

b.　学習理論　　学習理論では愛着と dependency（依存）は別のものと考えられている．Gewirtz[64] は愛着と依存は共に成人の刺激に対する子どもの反応即ち，刺激反応理論の説明概念にすぎず，この両者の違いは「依存は“人の集団”のもつ物的，行動的特徴が子どもの反応の強化刺激となり，愛着は“一人の特定な人”のもつ物的行動特徴が強化刺激となる（p. 171)[18]。」にすぎないとしている．つまり Gewirtz によれば愛着と依存の間には質的な違いはなく，単なる機能的な違いがあるにすぎず，このいずれを示すかは子どもがおかれている状況によって規定されるといえる．Cairns[42] [43] もまた愛着と依存は行動の集合に対して名づけられたものと考え，彼の関心はこの両者の関連に集中している．彼は最初(1961)[42]，子どもにとって母親の存在は食物などの無条件刺激と結びついたものと考え，愛着の強さは子どもが満足を感じた母親との相互作用の総頻度で示されると考えていた．しかし，その後（1972)[43] 彼は愛着と依存はともに複数の行動決定要因をもつ多次元的な行動現象であると考えるに至った．Sears[52] は依存は弁別学習によって二次的

児童学科所属

に獲得された動因であると考えている．そして依存の強化は種々の世話を通してなされ，母親は子どもにとって最初の reinforcer である．乳児の依存は注意，接近を求める行動で示され，一度形成された依存反応は他のものにも強化する性質をもっている．一方愛着とは「子どもが母親又は他の主たる保育者との愛情的結びつきが強くなる過程をさし，子どもは母親との視，聴覚的接触を保持するために非常なエネルギーを使い，母親から分離された時に非常な混乱に陥り，母親に再会した時に非常な喜びを示す過程（p. 18)[52]。」であり，「生後6～18ケ月に現われる．愛着行動が生じるためには子どもの成熟，保育者による一貫した愛情表現，子どもが他人と保育者を弁別出来ることが必要である(p.24)[52]。」，そして愛着は非常に個別的，特殊なものであり，保育者以外の他の人々に般化せず，愛着の強さは愛情の量，世話の量，子どもの要求への母親の反応の速さ，によって変化する．愛着は視，聴，触覚的に接触が可能な範囲に母親をおこうとする愛着行動によって示される．母親への愛着はその後，年長児への愛着にとって代わられ，さらに仲間への愛着へと代って行くと考えている．Sears は愛着を discrete behavior と考え，その強さには違いがあるものと考えている，Walters と Parke[49] もまた愛着を社会学習と考え，飢餓，保育というような身体的な欲求の満足が重要ではなく，「視，聴覚的刺激が重要である．その理由は子どもの距離感覚受容器が，従来考えられている以上によく発達しており，これが愛着形成に重要な役割(p. 86)[49]。」を果たし，さらに彼らは「注意と是認を求めることは，単に初期の身体的な依存要求の満足から分化するのではなく，最初から乳児が環境の知覚体験を通して，発達させる（p.89)[49]。」として，これらの行動の説明概念として，彼らは依存よりもむしろ愛着の語を用いる方がより適切であるとしている．愛着をその強さ，頻度として量的に考える立場では，愛着行動の安定性及び行動相互の関連性が問題とされている．例えば Coates, Anderson と Hartup[5),6)] は 10, 14, 18ケ月児の母親と分離，不分離状況での視覚的関心，発声，微笑，接触，泣き，母親が去ったドアへ接近，母親へ接近についてみたところ．これらの愛着行動の殆どのものの間にかなり高い相関を見いだしている．しかし，各年令におけるこれらの愛着行動の安定性は「母親へ接近」「接触」以外には殆んど見いだされなかったため，彼らは「愛着行動は一様に安定した体系をなすものではない[5)]」と結論している．Masters と Wellman[19)] は愛着に関する主な研究10編について，信頼性，安定性，妥当性を検討した結果「愛着行動における機能的同一性と安定性は殆ど認められない……さらに，人間の乳児の愛着行動の相関分析の結果は，心理的特性としての愛着の考え方に何ら支持を与えるものではない（p. 288)[19]。」と結論している．また従来，乳児は最初ある特定の一人の人に愛着を示し，後に複数の人々に愛着を示すと考えられていたが，Scha ffer と Emerson[16)] は18ケ月児が最初から複数の人々に対して愛着を示すことを見いだしている．彼らが用いた愛着行動は separation protest, stranger fear の非常に特殊な discrete behavior である．このことは愛着が二次的強化の結果，生じるのではなく社会的相互作用を通して生じることを示している．

上にみた種々の研究結果は，愛着を1つの特徴的な行動として考える entire trait construct の立場を弱めるものと考えられる。

c. Communication 理論　Bower[60)] は「小児が社会的愛着を形成した明白なサイン（p. 49)[60)]」として8ケ月の stranger fear と分離不安の発現を挙げている．彼は学習理論が愛着の形成について乳児が自己の満足と喜びとを母親の存在と結びつけ，不快と母親の不在とを結びつける考え方を否定し，乳児が8ケ月になるまでに「小児と母親は独特な個別的な communication の様式を形成し（p. 55)[60)]」「その特別な communication skill がさらに洗練され，その結果その communication code をもたない人々から小児を隔離してしまう（p.59)[60)]。」そして「language skill が誰れとでも communication 出来るようになった時に stranger fear と分離不安は減少する（p. 61)[60)]。」と，Communication skill の不足と愛着の hallmark である stranger fear と分離不安とを結びつけて考えている．この考え方は非常に興味あるものであるが，まだこれらの関連については何にも明らかにされていない．

d. Evolutionary-Ethology 理論　Bowlby[17)] は生態学的観点から愛着をみている　彼の理論は愛着と依存に対する精神分析学と学習理論的な考え方への批判として提出されたものである．彼によれば愛着行動は無力な乳児のそば近くに母親をとどめ，食物を獲得させ，母親から学習することを許すところの発達適応的な機能として重要なものであり，母親への接近は愛着体系の目標なのである．そして sucking, clinging, following, crying,

smilling の愛着行動はすべてこの目標に統合されているものであり，前者3つの行動は母親の近くに子どもをおくためのものであり，後者3つの行動は母親を子どもの近くに呼ぶためのものである．彼は生後一年間における愛着の発達段階としてつぎのものを考えている．①幼児がすべての人間に対して愛着行動を示す段階．②乳児が母親を弁別する段階，③乳児が積極的に母親に愛着行動を示す段階．④乳児と母親が1つの適切な目標を形成する段階，この段階では母と子の距離が許容限界を越えると乳児の愛着行動が自動的に活発化する関係が成立している．彼の理論は愛着形成の生物学的基礎を強調し，そして愛着形成には発達的可塑性の限界（臨界期）があるとしている．つまり乳児は一人の保育者と一対一関係を形成する傾向があり，もしそのような関係が形成されない場合は negative な発達をするというものである．この理論は愛着について新しい観方を導入したということで大きな意味をもつものといえる．

e. 体系論　Bischof[41] は先にみて来た多くの愛着の概念を統合するために system analysis を行なった．Bischof も Bowlby と同様に母と子の feedback 機構を考えているが，彼は愛着行動体系の目標は接近よりもむしろ“安定感”であり，愛着行動は乳児自身の感情によって行動が統制されると考えており，Bowlby のように乳児の愛着行動が外の状況によって全く自動的に引きおこされるものではないと考えている．

f. Organizational Construct　Ainsworth[28], [34] は Bowlby と同様に母親への接近を愛着体系の目標と考えているが，Bowlby のように「特定の対象への接近，接触を求める愛着とその接近が促進される愛着行動を分化して扱うことには慎重である（p. 103)[34]。」としながらも，愛着は永続的な安定した愛情的な結びつきであり，愛着行動は変動的で間欠的であるために，乳児のおかれている状況によって決定される，としている．この意味で愛着行動は他の行動と関連しており，特に探索行動との関連が考えられる，彼女は子どもが環境探索の安全基地として母親を使うことを非常に強調している．愛着と探索行動の関係は，愛着行動が活発でない状況（例，子どもが家庭にいる場合）では探索行動は活発化し愛着行動が活発な状況（例，母と子の間が許容距離を越える場合）では探索行動が中止されるというように相互に力動的な平衡関係にある．しかし探索行動が活発な状況でも母親への愛着が継続していることはありうるそこで彼女は愛着の強さよりもむしろその質をこそ考える必要があるとし，その質は「安定と不安定，愛着行動と接近・回避の関係，母親と接近・接触を求める時の ambivalence の程度，接近を求める行動の活発さと不活発さ(p. 120)[28]。」によっておさえられるとしている．この彼女の考え方には先にみた Bischof の安定感の考え方がとり入れられ，さらに質的な尺度が加えられたものといえよう．さらに，Ainsworth と Witting[30] は strange situation を用いて，愛着を質的に secure（B と示される），anxious（C と示される），avoidant（A と示される）に分類している．この安定性については Waters[14] が明らかにしている．Ainsworth によるとこのような質的な差は「乳児と愛着の対象との相互作用のあり方が，その乳児の愛着行動の発達の道すじを決定し，かつその行動がその乳児の愛着関係に繰り込まれる方法をも決定する（p. 125)[34]。」ことによって生じ，母子の愛着の発達に最も影響する母親の養育態度は感受性―無感受性，受容―拒否，協同―干渉，影響されやすさ―影響されにくさであるとしている．Sroufe と Waters[1] も依存と愛着の研究を概観したあと，愛着における個人差を強さの次元で，量的にとらえることは問題であり，愛着が形成される過程の質的な違いが愛着関係の個人差を示すという Ainsworth の考え方を支持している．さらに彼らは「愛着関係の質は保育者との愛着行動の形成とその場の状況を参考にすることによって最もよく評価される(p. 1188)[1]。」としている．彼らによれば，どの子どもの愛着行動の組織化も状況により変化し，多くの愛着行動は相互に機能的に入れ替えが可能であり，多くの愛着行動が別の行動体系をも満すことが可能であるために，どのような愛着行動がいつ生じるかを正確に予測することは不可能であり，予測可能なものは種々な行動が状況とかかわる，そのかかわり方なのであるとして，彼らは愛着を organizational construct であると定義している．この愛着の考えに立てば，愛着の質的面を使って適応の連続性を説明することが可能であり，discrete behavior, secondary drive のように抽象的な心理概念を強調するものでもないために，今後この領域での研究を行う上で理論的な基礎を与えてくれるものと思われる．

Competence について

competence 概念には愛着のように理論的な差はないが，その定義は研究者によってかなり違いがある．ここ

では乳児及び幼児の competence の定義について概観する．

a. 乳児の competence　Bell[50], Bell と Harper[51] によれば生まれたばかりの乳児であっても手足を動かす，泣く，微笑，音の方向に向くなどの行動によって保育者に影響を及ぼし，これらのすべての行動は乳児と保育者の社会的相互作用を促進する効果を持つものである．このことが結果的に乳児が環境にある統制力を持つことになると考えられるとしている．さらに Bellは乳児と保育者の社会的相互作用の50％以上のものが乳児から開始され，その乳児の行動が親の養育行動を選択的に強化する効果をもっているとしている．この考え方は受け身的な存在として考えられていた乳児が環境とのかかわりあいにおいて主要な役割を果たすことを明らかにし，非常に興味あるものといえよう．CondonとSander[64], Richards[38], Goldberg[56] もまた保育者への乳児の反応は“前適応状態”にあるにもかかわらず，乳児が自分に成人の注意をうまく引きつける能力のあることに注目している．Goldberg は乳児と保育者の相互作用に効果的な感情が生まれるのは，働きかけへの乳児の反応と働きかけを誘発する能力の両方によるものと考え，この乳児の能力を Social Competenceと呼んでいる．Condon と Sander は乳児の身体的な動きと母親の乳児への話かけの関係をスロモーションフィルムを使って，その同時性を明らかにしている．Lewis と Goldberg[37] は乳児の competence を養うためには保育者から与えられる偶然的な経験が重要であり，それが保育者の行動に対して一般的な結果の予測と乳児に生みだす効果をもっていると考えている．Ainsworth, Bell と Stayton[34] は乳児の泣くことへの保育者の反応が，泣くことを減少させると同時に，別の communication のやり方を育てるのであるとして，乳児の social competence における保育者の重要性に注目している．さらに Ainsworth と Bell[32] は competence の定義を，「乳児がおかれている環境の中で保育者とうまく相互作用ができること」としている．これは同時に保育者の適性とも大いに関係するものである．もし乳児が反応性豊かな保育者を持つ場合には，その発達，自信や skill の獲得，環境の探索や理解が保証されることになり，その乳児は competence を大いに発達させることになるわけである．Sigman[39] も同様に competence の指標として探索を考え，特に新奇なものの好みの発達に注目している．また Rubenstein[21], Yarrow, Rubenstein と Pedersen[25] も6ケ月児の competence の重要な指標として探索と新奇なものの好みとを挙げている．Wenar[8] は1才児の competence 行動の説明として探索，好奇心，模倣，自発性のような概念を用いることは不適切であるとして，彼は「強さ，持続性，行動の複雑さ，自己満足の要素からなる executive competence の語を用いる（p. 336)[8]」ことを提案している．Appleton, Clifton と Goldberg[59] は聴覚，視覚，言語，知覚運動，認知の領域で乳児の能力として記載されたものを概観し，乳児は環境を統制する能力即ち，指示し，選択し，継続する行動を示す competence 及び新しい skill に熟達することから喜びを引き出す competence そして自己動機づけの competence をもっていると結論している．

b. 幼児の一般的 competence　幼児の competence の概念から幼児の competence を考えたのは，White[16] である．White は第一次動因に基づいた動機づけ理論は，探索，移動，注意，知覚，言語，思考などの多くの重要な子どもの行動を無視しているとして，これらの行動を含みつつ，動機づけの考え方を拡大した competence 概念を提案している．White の competence とは環境における difference-in-sameness を生みだし，環境からの feedback を求める子ども自身の基本的な動機によって生じるのと考えている．この考え方はこの領域の多くの研究にとり入れられている考えである．Connolly と Bruner[23] は「単に知っているということよりも，いかに知っているかという非常に広い意味における知能（p. 3)[23]」が competence であると定義している．彼らのいう competence は環境を変える行為を含んでおり，それは①計画を作るために環境から必要なものを選択する，②計画した活動を実行する，③将来の計画のために得た知識を活用する，の3段階の行為を含むものであり，情報をうまく使うための柔軟性，与えられた情報にまさる推論，関連性を見だすなどの一般的知的 skill と自信のような情緒的なものから成っている．多くの研究者は一般的 competence の尺度に IQ を用いているが，competence の尺度に IQ を用いることは適切でないとして，もっと正確な competence の測定，定義の試みがなされている．例えば Zigler と Trickett[15] は competence は知能と social competence を含む包括的な概念であると考えている．彼らは social competence の測定は健康，一般知識，学力，情緒についてなされる必要があるとし，①社会的期待に応じうる人，②自己実

現・人格発達，の2つを主要な測定基準として考えている．これは情緒的変数と認知的変数の両方を含み非常に広い意味をもった social competence といえる．Anderson と Messick[54] もまた social competence を「発達しつつある子どもの認知と個人・社会的領域の広い範囲をもつ (p. 278)[54]」ものと定義し，29の構成要因を設定している．

c. 幼児の特殊 competence　上にみた social competence をさらに特殊な competence と考えている研究者もある．例えば Bronson[62),24)] は効果的な感情へ導く行動の実践力として White の competence の考え方に同意しながらも，さらに生態学的な方法である「心理機能の変化に関係し，かつ実際の生活を反映する状況での多くの行動の局面についての詳細な観察 (p.276)[62]」によって，多少その考え方を変更している．そして彼女は母親と幼稚園児の interactive competence を得点化し，この competence と就学後の子どもの外界とかかわる competence を関連づけようと試みている．Hess[47] もまた social competence を相互作用の観点から考えているが，Bronson とは違い，相互作用を person-relevant 行動と system-relevant 行動に分け，social competence とは system-relevant 行動そのものであると考えている．Kohn Rossman [35),36)] は幼稚園で実際に幼児の行動を観察し，90以上に亘る行動項目を抽出し，それらを因子分析し，social competence として因子を見いだした．それらは①興味・参加一無関心・引っ込み思案，②協同・従順一怒り・反抗である．これらの因子の正の極の行動はいずれも幼稚園生活へ適応するために必要とされるものであり，その意味ではHessのsystem-relevant 行動と同じものとも考えられる．O'malley[20] は social competence に関する研究を概観し，その定義と研究方法により，生態学的（例，Bronson, White と Watts），性格構成的（例，Kohn Rossman），社会相互作用的（例，Shantz）方法に分類している．そしてこれらに共通した social competence は目的性，適応性，柔軟性，分析性であることを見いだし，social competence とは「子どもとその仲間あるいは成人との間の生産的な，そしてお互いに満足する作用である．生産的な相互作用とは子どもの個人的な目標を遂げることであり，その目標とはその状況に適応したものである．相互作用は目標が遂げられた時に子どもに満足を感じさせ，そして目標達成のための子どもの活動が積極的に受けとめられるならば，他の人にとってもそれは満足となる (p. 29)[20]。」と定義している．White と Watts[7] は social competence と non-social competence に分け，さらに non-social cempetence を言語的 competence, 知的 competence, 実行能力，注意力に分けている．一般的にはこのような social non-social という分類は研究者によっては避けられる傾向があるように思われる．Baumrind[9),10)] Baumrind と Black[11] は competence を instrumental 機能と expressive 機能に分けている．instrumental 機能とは目標を決め，目標に導く機能であり，expressive 機能とは受容的，nurturant, empathic な機能である．Harter と Zigler[56] もまた Baumrind と同じような考え方に立ち，さらに White の効果による動機づけの考えをも考慮に入れ，competence を反応の変化性，目新しい刺激への興味，competence それ自身によってなされる強化，課題への挑戦と定義し，それらの間には全く関連性がないことを見いだしている．そしてこのことから彼らは competence は単一の構造をもったものではないと結論している．Wachs, Uzgiris と Hunt[61] は Piaget の知的発達の尺度である視覚的追随，ものの不変性の発見，意味の発達，schama の発達，発声的模倣，対象関係の尺度を使って認知的 competence を測定している．彼らは初期の competence の重要な面は後期の知的発達のための基礎的機能の獲得にあると考えている．

d. Organizational Construct としての Competence

すでに種々な competence について見て来た．乳児の competence については，Bell と Harper とは前適応能力と考え，Richards, Ainsworth, Bell, Goldberg, Lewis は社会的相互作用と考え，Rubenstein, Sigman は探索と新奇なものの好みと考え，Wenar, Appleton, Clifton, Goldberg は実行力と考えている．幼児の一般的 competence については White の考え方がその基礎となっているが，Zigler, Trickett, Anderson, Messick は competence の一般的な指標として IQ の使用を提唱している．また幼児の特殊 competence としては Bronson は相互作用，Hess は system relevant, Kohn と Rossman は興味と感受性，White と Watts は social, non-social competence, Baumrind は instrumental Competence, Harter と Zigler は effectance, Wachs, Uzgiris と Hunt は Piaget 理論を考えている．これらすべてに共通する考え方は，物的社会的環境との関係，探索，知識と技術，自信である．このような種々の定義をいかにして統合する

ことが出来るのであろうか．先にみた Sroufe と Waters の Organizational construct の考え方を competence の場合にも適応できないであろうか．子どもは先にみたような種々な competence 行動をその場の目的や要求に基づいて示すがこれらのすべての competence 行動がその子どもの competence の十分な指標であるとはいえない．むしろ子どもが各々の行動をその状況に適切な行動として組織化して行くことが，子ども自身の進歩を促進するものと思われる．この意味における competence は各々の行動の単なる合計よりもより優れたものであり，それは competence 行動を必要に応じ，適切，柔軟かつ発展的に組織し，行動を生じさせるやり方なのである．そして愛着行動が子どもの安全，安心，生存を保証するために生じることを考え合わせると，愛着行動もまた competence 行動の一種とみなすことが出来るのではないだろうか．Matas と Sroufe[24] は「12～18ケ月児の主要な仕事は，活発な探索と物的，社会的環境の理解であり，これらの competence が十分に機能するためには，愛着関係が成立していることが必要である（p. 547)[24]。」としている．

この領域の研究をすすめる際には，もし子どものおかれている状況が適切であるならば，その子どもの探索，新奇なものの好み，それ自身の目的の理解，環境との相互作用などの行動はすべて competence 行動と考えることが出来るものと思われる．そして competence を discrete 行動とみなさず，Organizational なものとして考えて行くことがより適切であると思われる．

愛着と competence の安定性

ここでは，子どもの側から愛着と competence の関係について考える．

Erikson は乳児の重要な課題は母親との間に基本的な信頼を形成することであり，その信頼が自主自立などの心理的基礎を成すものと考えている．Bowlby は乳児が困難に直面した時に母親と乳児の間に設けられた行動目標が接近であり，この目標に導く乳児の行動が愛着行動であるとし，愛着の絆は乳児の発達目的となり，この絆が安定した時に乳児は環境の探索に母親を安全基地として使用すると考えている．Ainsworth と Wittingは乳児と母親の永続的な愛情的な結びつきの質的な差は strange situation と呼ばれる研究法を用いて見いだしている．そして Ainsworth[29] によれば安定した愛着をしている小児（以下B児と記す）は探索の安全基地として母親を使い，その結果小児の環境理解，自信そしてcompetence を増すことが出来るとしている．また Ainsworth ら[31]によれば strange situation での母親の抵抗と子どものDQ，探索の長さ，探索時の興味の長さとは負の関連があり，母親の子どもを回避する行動は子どもの社会情緒的行動に悪い影響を与える傾向がある．またB児は他児に比較して探索時間対象への興味・注意，複雑な対象の細部へのかかわり，玩具やその他の対象への働きかけが有意に優れている。Matas, Arend と Sroufe[24] によれば，2才児の自由遊び場面での行動について，B児は他児に比較して想像的，抽象的遊びを多くし，問題解決場面では熱心であり，母親に従順で母親を無視することが少なく，課題から離れる時間や要求不満行動が少ない．また Connell[12] によれば，12ケ月のB児は新奇なものに直ぐ慣れるが，anxious babies（以下C児と記す）は対象に対して非常に用心深いため，新奇なものに触れることを拒否し，avoidant babies（以下A児と記す）は新奇なものに触れるけれども慣れることが少ない．Lieberman[2] は幼稚園児について，自由遊び場面での social competence を仲間への積極性と消極性についてみた所，安定した愛着をしている児は他の児に比較して competence が優れていることを見いだしている．Sroufe[3] は質的に高い愛着関係がいかにして competent 児をつくりだすかについて「子どもの探索と理解を支持し，それを許すことが子どもの対象理解に役立つとともに，子どもは自分の資質を信ずることが出来，そして必要な時にはいつでも成人から支持が得られることを学んでいるために，問題に熱中することが出来るのである．乳児はあなた方の信頼と情緒的な親密さを通して他人への暖かい感情や肯定的な期待をもつようになり，乳児はあなた方との愛情的なかかわりをもつことによって生き生きとし，感情豊かな，幸せな子どもとなり，乳児は愛情的な表現をすることが出来るようになる（p. 170)[3]。」と述べている．

親子関係．愛着．Competence

ここでは親子関係の側から愛着と competence の関係についてみる．

Bell[28] は愛着の質による違いと人．物関係の発達についてみたところ，B児は物との関係を形成する以前に人との関係を発達させるが，他児は先に物との関係を発

達させることを見いだしている．さらに安定した愛着をつくりだす親子関係は，認知的 competence の重要な基礎となる認知感覚運動の発達を容易にするとしている．Ainsworth[29] は生後一年間の間の安定した愛着の形成に影響する母子関係の変数としてつぎのものを挙げている．①母親との身体的接触の頻度と長さ，②身体的接触によってうまく乳児に安らぎを与える養育能力，③乳児の発する信号への感受性とその反応の豊かさ，④乳児のリズムにうまく合わせる養育能力，⑤環境を一定に保つ養育能力．これらの母子関係によって乳児は母親の行動の結果を予想することが出来るようになる．これが出来るようになるということは乳児が効果の感覚を持ったことを示す．この効果の感覚については Goldberg Lewis によっても指摘されている．その後 Ainsworth ら[31]は家庭での親子関係を観察し，養育的感受性，協同，情緒的表現，影響されやすさ，反応性という養育行動の変数が安定した愛着の形成に関連していることを見いだしている．さらに彼らは9～12ケ月のB，C，A児とその母親とのかかわり方に違いを見いだしている．B児は他児に比較して，泣くこと，分離不安が少なく，母親の働きかけは肯定的で，子どもから母親へ身体的な接触を求める頻度は高いが，一度それが達成されると直ぐに終結する，communication のやり方がうまく，母親の要求に対して従順である．またCとA児はB児に比較し，よく泣き，分離不安が強く，怒りやすく，母親との身体接触には ambivalence で，母親の要求に従順でない．C児とA児を比較した場合には，A児は母親との接触に対して不安と要求の両方をもっており，C児は母親が与えてくれる以上に母親との接触を求める傾向がある．つまりA児は母親と身体的接触を求めること自体を恐れ，C児は望むところの身体的接触が充分に得られないことを恐れている．Ainsworth らはこのような子どもの行動における差は養育行動の違いに原因すると考えている．つまり，B児の母親はより感受性が高く，協同的で，影響されやすく，受容的であるのに対して，A児とC児の母親は感受性が低く，干渉的で，無視的でそして拒否的であり，A児とC児の母親を比較した場合にはA児の母親はより干渉的で，拒否的であり，C児の母親は子どもの扱い方が無器用で，近づきにくく，無視的である．そのためにA児は母親との接触で拒否される体験を多く持ち，その結果母親との接触を避ける傾向があるのに対して，C児は母親によって無視される体験を多くするため，母親の影響されやすさについて信じなくなるとしている．Baumrind と Black らも同様に competence の発達と親子関係及び家庭環境との関連を明らかにしている．彼らは自己主張，自信，自己統制，探索からなる instrumental competence の尺度で高い得点を示した幼稚園児の親の養育態度をみたところ，これらの親は愛情的で，一貫性があり，厳格で，理性的で，子どもの望みを尊重する傾向があることを見いだしている．Bayley と Schaefer[40] は母子関係と幼稚園児の IQ 及び行動特性との関連について，その関連の仕方は子どもの年令と性によって違いが認められるが，高い IQ をもった子どもの母親は，子どもに熱中し，肯定的で，平等で，愛情的で，子どもの自主性を認めることを見いだしている．Clarke-Stewart[22] はまた6—18ケ月児の認知的，言語的，社会的発達に関する変数と情緒，刺激，反応に関する養育態度との間に正の相関が認められることから，子どもの一般的 competence と養育態度は関連すると考えている．Rubenstein[21] によれば6ケ月児の母親の養育行動を観察し，母親を高い注意力（HA）と普通（MA），低い注意力（LA）に分類し，各々の小児の探索行動と新奇なものの好みの得点を比較した結果，HA 児は他児に比較して，新奇なものへの好みが有意に高く，探索行動では HA 児は LA 児よりも有意に高い得点を示した．Yarrow, Rubenstein, Pedersen と Janowshi[26] は6ケ月児に同様のテストを行ない，その得点が子どもの物的環境の変化性，複雑性，反応性と母親の反応性，愛情との間に関連性を見いだしている．特に探索行動は子ども自身が触れることの出来る物がもつ変化性と関係し，新奇なものへの好みは物の変化性，複雑さ，反応性及び母親の養育行動と関連していることを見いだしている．さらにYarrow[27] らは同じ被験児について，19ケ月時，3才6ケ月時にも同様のテストを行ない，初期の competence と後期の competence 及び初期の環境要因と後期の環境要因の間に関連があることを見いだしている．また6ケ月時と19ケ月時の Bayley テストの得点の間には有意差は認められないが，6ケ月と3才6ケ月の IQ，6ケ月時の社会環境変数と19ケ月の探索行動，6ケ月時と19ケ月時の養育行動の間に有意な正の相関が認められた．また初期の養育行動と3才6ケ月の IQ の間には有意な相関は認められなかったが，正の傾向が認められたという．これらの結果は初期の経験がその後の機能にとって重要なものであるが，その影響は長期に亘って影響するものでない

ことを示しているといえよう．WhiteとWatts[53] は competence を社会的能力と非社会的能力に分け，知的な幼稚園児の家庭環境についてみた結果，これらの幼児は“見ることの出来るカリキュラム”と呼ばれるところのものをもっていることを見いだしている．Elardo, Bradley と Caldwell[48] と Bradley と Caldwell[44],[45] は54ケ月時の知能テストと6，12，24ケ月時の家庭環境の間に相関を見いだしている．彼らは Caldwell, Heider と Kaplan[4] が作成した HOME (Home Observation for Measurement) を家庭環境の調査に使用している．これは①母親の情緒，言語的反応，②制限・罰の回避，③物的環境，④玩具の適正，⑤養育能力，⑥日常生活の変化性，の6尺度，45項目からなっており，評定は家庭での行動観察と面接の両方によってなされる．結果は，子どもの年令によって各々変化するが，HOME, Stanford-Binet, Bayley テストの各々の間には有意な正の相関が認められ，特に HOME の1，4，5の尺度は被験児のすべての年令に重要な項目であった．特にこれらの3尺度は12ケ月の Bayley テスト，36，54ケ月の Binet テストと有意な相関を示していた．彼らは，子どもの知能テスト得点の増加には HOME の1が関連し，知能テスト得点の減少には HOME の3の得点の低さが関連していることを見いだしている．また別の研究[46]で，6，24か月時の HOME 得点と36か月時の ITPA (The Illinois Test of Psycholinguistic Abilities) の得点との関連を見いだしている．この研究においても HOME の1，4，5の尺度が有意な関連を示した．Wachs, UzgirisとHunt[61] も7，11，15，18，22ケ月児の家庭環境と competence の関連をみている．彼らは家庭環境テストとして HOME を一部修正したものを用い，competence の測定には Piaget の IPDS (Infant Psychological Development Scale) を用いている．その結果，彼らはこれら両者の間に種々な相関を見いだしている．また子どもにとって重要な環境要因は年令，経験，認知構造によって違うことを見いだしている．

結 語

以上見て来たように愛着は単一の行動特徴とみなさず，物的，社会的状況及び子ども自身の状況など多くの要因によって変化する行動の組織体として考えることが，最も妥当と考えられる．そしてまた competence も同様に考えることが出来る．愛着と competence との関係は愛着が competence の subset として位置づけられるものといえる．このように考えるならば，また愛着を導き出す親子関係，competence を導き出す親子関係もかなり重複し合う面を持つことが考えられる．そしてこの親子関係はともに親子関係，subset でもあるわけである．このようなことから，愛着，competence 愛着を導き出す親子関係，competence，を導き出す親子関係は相互にかなり強い相関関係があることが仮定される．今後，研究をすすめる中でこの仮定について検討する予定である．

謝 辞

本稿は昭和53年4月より昭和54年5月末まで一年余りに亘って米国，テキサス州立大学オースチン校の家政学部児童学科に在外研修員として滞在した際の研究成果の一部をまとめたものである．

在外研修員として留学する許可を下さいました東京家政大学三木テイ学長，留学に際しいろいろご配慮下さいました山下俊郎教授，津郷友吉教授，堀内康人教授，跡見一子教授，橋口英俊教授，川合貞子講師及び諸先生方に心から感謝を申し上げます．

また本研究をまとめるにあたって直接ご指導下さいましたテキサス大学家政学部長の Dr. Durrett，研究をすすめるにあたっていろいろ助言して下さった同学部児童学科長 Dr. Richards 及び同学科教授の Dr. Grotevant, Dr. Hulls そして院生の Mrs. Moss に心から感謝を申し上げます．

文 献

1) A. L. Sroufe and E. Waters : Attachment as an Organizational Construct. *Child Development*, **48**, 1184 (1977)

2) A. Lieberman : Preschoolers' Competence with a Peer : Relations with Attachment and Peer Experience. *Child Development*, **48**, 1277 (1977)

3) A. Sroufe : *Knowing and Enjoying your Baby*. Prentice Hall, Englewood Cliffs, New Jersey, 1977.

4) B. Caldwell, J. Heider, and B. Kaplan : Home Observation for Measurement of the Environment. A Paper Presented at the Meeting of the American Psychological Association, New York, September, 1966.

5) B. Coates, E. P. Anderson, and W. W. Hartup : Interrelations in the Attachment Behavior of Human Infants. *Developmental Psychology*, **6**, 218 (1972a)

6) B. Coates, E. P. Anderson, and W. W. Hartup : The Stability of Attachment Behaviors in the Human Infant. *Developmental Psychology*, **6**, 231 (1972b)

7) B. L. White and J. C. Watts : *Experience and Environment*, Prentice Hall, Englewood Cliffs, New Jersey, 1973.

8) C. Wenar : Competence at One. *Merrill-Palmer Quarterly*, **10**, 329 (1964)

9) D. Baumrind : The Contributions of the Family to the Development of Competence in Children. *Schizophrenia Bulletin*, **14**, 12 (1975a)

10) D. Baumrind: Some Thoughts about Child Rearing. In U. Bronfenbrenner and M. A. Mahoney (Eds.), *Influences on Human Development*, Dryden Press, New York, 1975b.

11) D. Baumrind, and A. Black : Socialization Practices Associated with Dimensions of Competence in Preschool Boys and Girls. *Child Development*, **38**, 291 (1967)

12) D. B. Connell : Individual Differencess in Infant Attachment Behavior : Relations to Response to Redundant and Novel Stimuli. *Unpublished Masters Thesis*, Syracuse University, 1974.

13) E. Erikson : Identity and the Life Cycle. *Psychological Issues*, **1**, 52 (1959)

14) E. Waters : The Reliability and Stability of Individual Differences in Infant-Mother Attachment. *Child Development*, **49**, 483 (1978)

15) E. Zigler, and P. Trickett : IQ, Social Competence, and Evaluation of Early Childhood Intervention Programs. *American Psychologist*, **33**, 789 (1978)

16) H. R. Schaffer and P. E. Emerson : The Development of Social Attachments in Infancy. *Monographs of the Society for Research in Child Development*, **29**, (serial No. 94) (1964)

17) J. Bowlby : *Attachment and Loss*, Vol. **1**, Attachment, Basic Books, New York, 1969.

18) J. L. Gewirts, (Ed.) : *Attachment and Dependency*. V. H. Winston and Sons, Washington, D. C., 1972.

19) J. Masters and H. Wellman : The Study of Human Infant Attachment : a Procedural Critique. *Psychological Bulletin*, **81**, 218 (1974)

20) J. M. O'Malley : Research Perspective on Social Competence. *Merrill-Palmer Quarterly*, **23**, 29 (1977)

21) J. Rubenstein : Maternal Attantiveness and Subsequent Exploratory Behavior in the Infant. *Child Development*, **38**, 1089, (1967)

22) K. A. Clarke-Stewart : Interactions between Mothers and their Young Children : Characteristics and Consequences. *Monographs of the Society for Research in Child Development*, **38**, (serial No. 153) (1973)

23) K. Connolly and J. Bruner : Competence : its Nature and Nurture. In K. Connolly and J. Bruner (Eds.), *The Growth of Competence*, Academic Press, New York, 1974.

24) L. Matas, R. Arend and A. Sroufe : Continuity of Adaptation in the Second Year : the Relation between Quality of Attachment and Later Competence. *Child Development*, **49**, 547 (1978)

25) L. Yarrow, J. L. Rubenstein, and F. Pedersen : *Infant and Enviranment*, John Wiley and Sons, New York, 1975.

26) L. Yarrow, J. L. Rubenstein, F. Pedersen, and J. Janowski : Dimensions of Early Stimulation and their Differential Effects on Infant Development. *Merrill-Palmer Quarterly*, **17**, 205 (1971)

27) L. Yarrow, R. Klein, S. Lomonoco, and G. Morgan : Cognitive and Motivational Development in Early Childhood. In O. Z. Friedlander, G. M. Sterritt and G. Kirk (Eds.), *Exceptional Infant*, Vol. **3**., Brunner/Mazel, New York, 1975.

28) M. D. S. Ainsworth : Attachment and Dependency : *a Comparison*. In J. L. Gewirtz (Ed.), *Attachment and Dependency*, V. H. Winston and Sons, Washington, D. C., 1972.

29) M. D. S. Ainsworth : Infancy in Uganda : *Infant Care and the Growth of Love*, Johns Hopkins Press, Baltimore, 1967.

30) M. D. S. Ainsworth, and B. S. Wittig : Attachment

and Exploratory Behavior of One-Year-Olds in a Strange Situation. In B. M. Foss (Ed.), *Determinants of Infant Behavior*, IV., Methuen, London, 1969.

31) M. D. S. Ainsworth, M. C. Blehar, E. Waters, and S. Wall : *Patterns of Attachment : a Psychological Study of the Strange Situation*, Lawrence Erlbaum Assoc., Hillsdale, New Jersey, 1978.

32) M. D. S. Ainsworth, and S. M. Bell : Mother-Infant Interaction and the Development of Competence. In K. Connolly and J. Bruner (Eds.), *The Growth of Competence*, Academic Press, New York, 1974.

33) M. D. S. Ainsworth, S. M. Bell, and D. J. Stayton : Individual Differences in the Strange Situation Behavior of One-Year-Olds. In H. R. Schaffer (Ed.), *The Origins of Human Social Relations*, Academic Press, London, 1971.

34) M. D. S. Ainsworth, S. M. Bell, and D. J. Stayton : Infant-Mother Attachment and Social Development: Socialization as a Product of Reciprocal Responsiveness to Signals. In M. P. M. Richards (Ed.), *The Integration of a Child into a Social World*, Cambridge University Press, London, 1974.

35) M. Kohn and B. L. Rossman : Relation of Preschool Social-Emotional Functioning to Later Intellectual Achievement. *Developmental Psychology*, **6**, 445 (1972a)

36) M. Kohn and B. L. Rossman : A Social Competence Scale and Sympton Checklist for the Preschool Child. *Developmental Psychology*, **6**, 430 (1972b).

37) M. Lewis and S. Goldberg : Perceptual-Cognitive Development in Infancy : a Generalized Expectancy Model as a Function of Mother-Infant Interaction. *Merrill-Palmer Quarterly*, **15**, 81 (1909).

38) M. P. M. Richards : First Steps in Becoming Social. In M. P. M. Richards (Ed.), *The Integration of a Child into a Social World*, Cambridge University Press, London, 1974.

39) M. Sigman : Early Development of Preterm and Full Term Infants : Exploratory Behavior in the Eight-Month-Old. *Child Development*, **47**, 606 (1976)

40) N. Bayley, and E. S. Schaefer : Correlations of Maternal and Child Behaviors with the Development of Mental Abilities: Data from the Berkeley Growth Study. *Monographs of the Society for Research in Child Development*, **29**, (serial No. 97) (1964)

41) N. Bischof : A Systems Approach toward the Functional Connections of Attachment and Fear. *Child Development*, **46**, 801 (1975)

42) R. B. Cairns : The Influence of Dependency Inhibition in the Effectiveness of Social Reinforcement. *Journal of Personality*, **29**, 466 (1961)

43) R. B. Cairns : Attachment and Dependency : a Psychological and Social-Learning Synthesis. In J. L. Gewirtz (Ed.). *Attachment and Dependency*, V. H. Winston and Sons, Washington, D. C., 1972.

44) R. Bradley, and B. Caldwell : Early Home Environment and Changes in Mental Test Performance in Children from 6—36 Months. *Developmental Psychology*, **12**, 93 (1976a)

45) R. Bradley, and B. Caldwell : The Relation of Infants' Home Environment to Mental Test Performance at 54 Months : a Follow-Up Study. *Child Development*, **47**, 1172 (1976b)

46) R. Bradley, B. Caldwell, and R. Elardo : Home Environment, Social Status, and Mental Test Performance. *Journal of Educational Psychology*, **69**, 697 (1977)

47) R. D.Hess : Social Competence and the Educational Process. In K. Connelly and J. Bruner (Eds.), *The Growth of Competence*, Academic Press, New York, 1974.

48) R. Elardo, R. Bradley, and B. Caldwell : The Relation of Infants' Home Environments to Mental Test Performance from 6—36 Months : a Longitudinal Analysis. *Child Development*, **46**, 71 (1975)

49) R. H. Walters and R. D. Parke : The Role of Distance Receptors in the Development of Social Responsiveness. In L. P. Lipsitt and C. C. Spiker (Eds.), *Advances in Child Development*, Vol. **2**., Academic Press, New York, 1965.

50) R. Q. Bell : Contribution of Human Infants to Caregiving and Social Interaction. In M. Lewis

(Ed.), *The Effect of the Infant on its Caregiver*, John Wiely and Sons, New York, 1974.

51) R. Q. Bell, and R. V. Harper : *Child Effects on Adults*, Lawrence Erhlbaum, Hillsdale, New Jersey, 1977.

52) R. R. Sears : Attachment, Dependency, and Frustration. In J. L. Gewirtz (Ed.), *Attachment and Dependency*, V. H. Winston and Sons, Washington, D. C., 1972.

53) R. White : Motivation Reconsidered : The Concept of Competence. *Psychological Review*, **66**, 297 (1959)

54) S. Anderson and S. Messick : Social Competency in Young Children. *Developmental Psychology*, **10**, 282 (1974)

55) S. Freud : Introductory Lectures on Psychoanalysis. *The Standard Edition of the Complete Psychological Works of Sigmand Freud*, Vol. **XVI**., Hogarth Press, London, 1963.

56) S. Goldberg : Social Competence in Infancy. *Merrill-Palmer Quarterly*, **23**, 163 (1977)

57) S. Harter and E. Zigler : The Assessment of Effectance Motivation in Normal and Retarded Children. *Developmental Psychology*, **10**, 169 (1974)

58) S. M. Bell : The Development of the Concept of Object as Related to Infant-Mother Attachment. *Child Development*, **41**, 29 (1970)

59) T. Appleton, R. K. Clifton, and S. Goldberg : The Development of Behavioral Competence in Infancy. In F. D. Horowitz, M. Hetherington, S. Scarr-Salapatek and G. Siegel (Eds), *Review of Child Development Research*, Vol. **4**, University of Chicago Press, Chicago 1975.

60) T. G. R.Bower : *A Primer of Infant Development*, W. H. Freeman and Co., San Francisco, 1977.

61) T. Wachs, I. Uzgiris and J. Hunt : Cognitive Development in Infants of Different Age Levels and from Different Environmental Backgrounds : an Exploratory Investigation. *Merrill-Palmer Quarterly*, **17**, 283 (1971)

62) W. C. Bronson : Competence and the Growth of Personality. In K. Connolly and J. Bruner (Eds.) : *The Growth of Competence*, Academic Press, New York, 1974a.

63) W. C. Bronson : Mother-Toddler Interaction : a Perspective on Studying the Development of Competence. *Merrill-Palmer Quarberly*, **20**, 275 (1974b)

64) W. S. Condon, and L. W. Sander : Synchrony Demonstrated between Movements of the Neonate and Adult Speech. *Child Development*, **45**, 456 (1974)